

10 施 肥

標準施肥量及び施肥時期は第II-134表のとおりである。日本すもも、プルーンは窒素に対して非常に敏感で、多施用すると過繁茂となって着色が遅れる原因となり、逆に少ない場合は収量が上がらず果実品質も劣る。これらの点を考慮しながら、個々の園地の地力や樹の観察を行いながら増減する。

第II-134表 標準施肥量及び施肥時期

成 分	標準施肥量 (kg/10 a)			施肥時期	
	~3年生	4~8年生	成木(9年生~)	10月中旬(基肥)	収穫後(礼肥)
窒 素 (N)	5	10	14		
リン酸 (P_2O_5)	2	4	6	80%	20%
カリ (K_2O)	3	6	10		

注) 標準施肥量は、個々の園地の最適量ではない。個々の園地の最適施肥量については、標準施肥量を基準にし、樹の観察を行いながら増減する

11 生理障害とその対策

(1) 日焼症

果実の成熟間近に発生する生理的障害で、水分生理上の異常とされている。

ア 症 状

樹冠の内側、外側を問わず発生する。果実の側面や果頂付近に紫紅色の斑点が現れ、これを中心として輪紋を描き、やがて果実の半分にも拡大する。さらに症状が進むと障害の中心部は指で押すと、しきりがあるように硬く、この部分を切ってみると、健全部との境界付近の果肉は軟化しているが、障害の中心部の果肉は褐変し、塊状で硬い。

発生は、品種間で差があり、ビューティは特に発生が多く、大石早生すももやサンタローザは発生が極めて少なく、ソルダムは発生が確認されていない。秋姫でも果皮や果肉に類似の症状が見られることがあるが原因は明らかでない。一部の果皮障害は遮光率の高い袋をかけると発生が少なくなる。

イ 防止対策

硬核期から着色前後までの土壤水分が極端に過湿や過乾とならないように土壤管理を行うとともに、窒素の多施用を避け、健全な土づくりを行う。

(2) しなび果、しわ果(プルーン)

ア 症 状

果梗と果皮のつけ根部分にしわがよってしなびた症状を呈する。収穫近くから収穫後半に見られる。収穫が遅れて樹上で完熟し、果実の水分がやや減少してくるとしなび果が目立つ。収穫前の降雨など土壤水分の急激な変化とその後の高温でも発生が見られる。

イ 防止対策

雨よけ被覆により降雨を遮断し、被覆内部の高温防止のために換気を行う。適期収穫に努める。